



近藤氏藏書			
一	四	和書門 歷史	類函
〇	六		
冊	號	函	類

止 十一

リ 5  
6039  
114





門 5  
6039  
11

大同記八物語中目錄

上下雜用

- 一 才智孫御之無減衰之天下國事ハ世に傳へる
- 一 湯瀨病之瀧之重
- 一 志の富貴
- 一 瑞所獲之功剛
- 一 一人才之志の甚あり
- 一 上務
- 一 撰出之法
- 一 真討
- 一 因山水之親於世
- 一 瑞石は父の志を傳へる
- 一 威福常る不を得
- 一 宰相の志を傳へる

藤忠

文庫

昭和十八年  
六月三日  
小田丹吉氏  
長男友太郎  
大澤贈



要語

一國手物語あり

一君子の志あり

一政道あり

一論命あり

一論去少就大

一論己後命

一吾身之財所即天あり

教戒

一慈母立あり

一能戒

一重人之位

一操正身

一論史志

一論後身業

一有自能之實

一海濱の撰本獄友

一母を侍あり

一孝道

一兄弟

一兄弟

一兄弟の友あり

要道

一海物あり

一君臣の睦あり

一重小人の信あり

一重君子の勇あり

一國の政あり

一夫婦

一志士仁人の撰本妻あり

一朋友

一人の癖病あり







拙なるまじりぬらひの存に程をわく皆を  
ひゆるまじりぬらひの存に程をわく皆を  
と且うまじりぬらひの存に程をわく皆を  
けりぬらひの存に程をわく皆を  
よそ家風は古くを敬ふに彩り白く  
るまじりぬらひの存に程をわく皆を  
ぬらひの存に程をわく皆を  
ては曉るまじりぬらひの存に程をわく皆を  
ぬらひの存に程をわく皆を

思ふまじりぬらひの存に程をわく皆を  
かまじりぬらひの存に程をわく皆を  
ぬらひの存に程をわく皆を  
もぬらひの存に程をわく皆を  
此職の在時にぬらひの存に程をわく皆を  
上はぬらひの存に程をわく皆を  
ひぬらひの存に程をわく皆を  
伝連るまじりぬらひの存に程をわく皆を  
まじりぬらひの存に程をわく皆を  
くぬらひの存に程をわく皆を











蓄積は多し物無所不容作是則安重有力  
而事必成嗜觀山水者可以觀我矣  
一志乃富也

君子は道のことの道もをといふも。一才は此の道に  
とて富も。はたありては。亦たあり。此の道も。と  
系と。位福も。とて。心うつ。と。患難も。あ  
み。と。縁も。多し。唯。理。も。自然に。心  
教。う。れ。つ。ま。是。も。富。也。なる。事。

一能。君臣父子朋友之間。向。而。美。す。成。之。論

凡天下至於一國一國。至。於。萬。民。之。中。有。者。皆  
由。之。而。出。也。中。外。之。合。美。以。玉。美。地。之。生。美。和。之。成  
皆。合。之。能。也。君。臣。父。子。親。戚。朋。友。之。間。有。難。或  
怨。隙。志。益。流。於。間。而。有。乃。也。美。暇。不。亦。矣。  
諺。曰。何。事。の。ん。ん。の。中。あ。り。と。有。る。も。以。皆。獲  
利。の。志。も。ま。り。と。あ。り。と。有。る。も。以。皆。獲  
多し。

一漸。後。之。初。の。つ。と。な。る。も。と。得。也。  
う。と。漸。激。の。勢。も。は。そ。う。一。つ。の。も。一。七。世。の。末



きんこ  
さそり  
あふし

あまのこは新海の波よ信をまきまき  
人と海をくまんとあふしと又海をいふ  
しうし。唯物に旅をわたりて旅を  
らまの海の大切な信あり。舟人のるまも  
船人あふし。うらうらの海をまきまき  
とあまのこはまきまき。されしと  
し。あまのこは海をまきまき。あまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは

そ物もなるにそ物もあふし。これの  
し。あまのこはあまのこはあまのこは  
一威福家平の事  
ままの事。あまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは

酒白熱生りのつらさ。あまのこはあまのこは  
し。大任之職もあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは  
あまのこはあまのこはあまのこは

往曰篤実則力量深厚而謀慮審固斯所以任大事也

されし萬重あまのこはあまのこは







唐の義理は其に合て大小を日正し毎に業  
家也。其の推して法のあるあり。  
凡そ其の法は性行の淨潔を其家存続有産  
船孔遜直水季業曉事進治を志す上  
海日中より七の法を推して事お職り  
をわたり。國内は法を執るにわたりしを  
其のふくむ用を國に適て業をわたりし  
物也。  
一、宰相の位は其の尊く、字は掛へる受  
君の法をあらふにそのれをわたりし味の厚

唐を日々に有るべきを利するものなり。其の  
老人口をその目をして利するものなり。其の  
能利するに其の業を利するものなり。其の  
家のもとの權威を其の時、其の權威を其の  
其れ、其の業を其の時、其の權威を其の  
君能に其の業を其の時、其の權威を其の  
其の業を其の時、其の權威を其の  
其の業を其の時、其の權威を其の  
其の業を其の時、其の權威を其の  
其の業を其の時、其の權威を其の



人國政の如きものたるを物成るに正なりとの言  
 神つゝあらうして何なるやとてやめり物成る事  
 君成るを白日よマシキ建ひんとなすべし或る君成  
 しを善ししを存やうある事也。口口口口して才何存  
 人々を善く成るやうに物一物れに成る比  
 うはし。君成るを成る事也。  
 此の如き忠を善く成る事也。君成るの計を勤  
 むべし。又善くも能く成る事也。物成る事也。  
 を能く成る事也。善く成る事也。善く成る事也。  
 ひめふの心と強て善く成る事也。善く成る事也。

八丈人。一也此を善く成る事也。善く成る事也。善く成る事也。  
 の善く成る事也。善く成る事也。善く成る事也。善く成る事也。  
 一也此を善く成る事也。善く成る事也。善く成る事也。善く成る事也。  
 善く成る事也。善く成る事也。善く成る事也。善く成る事也。

一真計

人定之治天下必先正其治之之主也。人定之治天下  
 必先正其治之之主也。人定之治天下必先正其治之之主也。  
 人定之治天下必先正其治之之主也。人定之治天下  
 必先正其治之之主也。人定之治天下必先正其治之之主也。



此為故之用孔子之心也

或曰吾於子也近也此是に似之存あり天

正之此前尾端也信雅の所に清川之義あり

尾列其有 尾列其有 淺井田字九 尾列其有

年十 **△** 何事七爪牙之長也信雅卿の心も

善吉公殿の相得これ先此三雄の義一語也

強之義象有上に此三雄の義一語也

強之義象有上に此三雄の義一語也

強之義象有上に此三雄の義一語也

十二年三月二日於尾列長為雄三人を生害し  
多小くして三年のくは信雅の心は田原一  
身あり三才と司の給ひ一語もさり也  
豈尾列勢列もえられ給ふ人也

○要語

一能之我事

天理也人亦理也隨理則与天為二与天为一我非我也理

心理非理也天也唯文王純德故曰在帝左右 性理大全

一因于物修我行

青天白日以定心泰山喬嶽以立身水清玉潔以操行 克亭肩



活而能休之矣大矣子之也

一能事其物之極子

千金之寶可以儲蓄十金之寄不可以與人非愛十  
金而勝於千金也有所愛也己不得而私也 古之所謂

一國主國也其也其也其也

君子終之矣直言不為其說人益進而直言例直  
言例則君主嫌於其國行而其身事死其也其也

大明統志

一君子之也其也其也其也

呂氏曰貴必尚功則必崇所刻核之端也罪疑是極也

子疑志

疑惟重君子長者之心也其君子也其也其也其也

自吾刻核之端也君子不盡人之歡不竭人之忠其

也必可使復仕去其也必可使復嫁也其也其也其也

薰蒸則太平之功可立也也其也其也其也其也

大明統志

一聖人之也其也其也其也

前

直而溫寬而栗剛而不猛簡而無傲

日

一以道之也其也其也其也

天以陽生萬物以陰成萬物生仁也成義也故聖

人在上以仁育萬物以義正萬物天道行而萬



物順聖德而美民化大明大化不見其迹者  
知其能之謂神故天下之命本在上一人之豈  
遠乎術豈多乎哉

一聖人感天下之心無所不通無所不應者曰聖  
正者居中之無我之謂也為心者皆偏而已

一命安時者也  
死生自命也貧窮自時也然天折者不知命也  
怨貧窮者不知時也當死不懼在窮不戚知  
命安時者也

一論大真

列子

秦伯曰豈以批糠累大真乎

或曰保周祚八百之年余年者天地之神感於此  
大真矣

一論去小就大

思量前古當今之命亦僅其志一二大者

一守儉

儉於聽可以事君儉於視可以事親儉於言可以  
事心儉於財可以獲富儉於心可以保貴儉於  
嬪嬙可以保壽命儉於心可以出生死

一論備己後命



富貴貧賤莫不有命古人當終已俟命好為進  
物所哇

一知有命之實

看得道理儘自穩實

一吾身之明所即天也

學者七無志矣以思為事之足以為家者

步的

一能刑獄之官以道動之

夫惟刑獄之官以奉用者人之心也惟道之

多則行先王之法也

陶氏年滿一何尹也幸而為民抗  
東之安之置焉也  
人形也其心也  
有義者七  
と縁あり  
人形也其心也  
と縁あり  
人形也其心也  
と縁あり

何と人形也其心也



何れもを海に〜と因て奸情を伺出さる多し  
向取中並お捕候此なり〜と云其因取お以謝  
と云三條候〜とや思ひきん自徑服一候云  
有りと物思つるに余人の所ハ斬刑に極め候旨  
らる事申並お捕候の自取も服せ候事候旨  
有と云先取取と云あまの氏費一取よと云  
候なり。幸樂に寡婦奸男に因て寡子をあな  
取の何種〜と云〜と云候奸と云〜  
取の取と釋〜のり作史に斐光の朱取の家  
割取〜と云〜と云〜と云〜と云

是生此徳出と云斐光の母取取と云わ  
〜のり云。産豊三年遊學及勤め歸り〜  
と云他人と奸〜と云豊と取さんと傳〜  
〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云  
〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云  
豊不徳楚掠自徑服〜と云利中人取と云  
〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云  
〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云  
奸人取取と云〜と云〜と云〜と云  
可取〜と云〜と云〜と云











一 孝道

伯真ハクギョもやまをばふるあり。母ハハをシひふ。真  
泣てナクくクぬルきキんンくク。母曰と汝ニ也ニ  
事コト何ニやとシりシりリ。伯真曰母ハハ公コウ其キ力リキ今  
具カウ行コウくクぬルきキんンくク。母ハハと痛イタじシのノ昔コトよ  
也。呼イひヒてテあアをオれレをウりリ  
孟モウ熈キ至シ存ソウくクてテ父フとト妻メ食シふフ。志シはハ弱ジヤクくク事コトと  
考モトめメとトぬル家イ家カをウるルふフなりリ。菓コノ実ミとト定サ食シふフ  
小コ焚シ辛シ勞ラウ力リキとト厭イひヒてテ父フをウりリくク哀アハ號カウ

一 夫婦

一 築キ性コウと滅メツをウりリ。皆ハハと地チよヨあアをオりリ上ウよヨ  
とトりリのノ三サン年ネン。旨チ味ミとト知チとト親カニ色シキをウりリすスいイなりリ。因イン  
てテ二ニ胤イン来キくク地チとトりリ穿ウつツ事コトをウりリ是シとト於オ  
黃ワウ令レイ殺シふフあアありリ天テン乃ノあアをオりリぬルふフとト殺シ  
きキりリ。是シよりリ何ニもモ幸サイをウりリ大ダイなるル富フあアりリをウりリ  
了リョウなりリ。詩曰シト掘コ胤イン何ニ由ユ處ト得トク金キン。孝コウ親シン於オ此コノ感カン天テン  
心シン一イツ時ジ不フ但ダニ家カ能ネ富フ贏エツ得トク香カウ石シキ説セツ到トウ令レイ  
或オク同ドウ於オ郁イク離リ子シ言ゴン在ザイ律リツ婦フ七シチ書ショ聖セイ人ニン之シ言ゴン与ユ曰ト



是後世薄夫之所云非聖人意也其婦一從夫者也。淫也。妬盜不孝也。多言也。五者天下之惡德也。婦而有焉。出之宜也。惡疾與無子豈人所欲哉。非所欲而得之不幸之大者矣。而出之惡矣哉。夫夫婦人倫之一也。婦以夫為天。不矜其不幸而遂弃之。豈天理哉。

婦乃德之順也。天下小教之名也。教之為者。系羊子者。嚴師之為求也。けり。三年。けり。けり。來りぬ。書。跪て。も。お。同。羊子曰。久る。向。と。始。よ。依。て。ある。乃。と。無。他。書。此。曰。乃。と。心。操。子。向。

て曰。以。棧。生。於。蚕。菌。其。於。棧。梯。一。糸。以。累。て。寸。小。也。り。累。守。不。已。則。遂。成。丈。匹。我。今。世。操。と。新。る。成。功。立。小。免。一。う。か。下。夫。子。乃。学。業。急。然。たり。積。学。之。七。而。之。知。く。勤。め。の。徳。と。ん。り。此。終。一。下。あ。中。途。り。て。甚。と。始。ひ。を。と。何。そ。い。操。と。改。り。夫。乃。く。じ。や。と。徳。一。う。か。羊。子。も。も。感。一。後。性。て。学。子。と。積。の。徳。と。み。う。も。年。一。輝。名。と。天下。小。費。一。古。心。よ。改。來。よ。けり。評。曰。夫。婦。之。乃。是。義。と。定。と。一。て。終。ひ。一。







海に舟を乗せしむるに  
ても。いふまに舟のあはれに  
てしむる。

一見事

新國キタ宣公の太子キタ伯イホの妻とて一人志見  
なり。あはれ母ハハと殺コロし妻とて。諸國シヨクに嫁カハ  
せしむる。とて。いふまに。の朝とつて。さう  
謀マカふ。妻メケは。是コノとて。て。しむる。或シ時トキ毎  
に。しむる。とて。いふまに。因ユて。河カハ中ナカに。しむる。殺コロし  
せし。妻メケは。案アヒし。て。回マ船ネし。とて。いふまに。何  
も。兄ケイと。同トウし。とて。いふまに。とて。いふまに。是コノに。依ヨ

て。其コノ日ヒ。一ヒト意イなり。其コノ後ノチ宣公ノの。母ハハとて。やうに。伯  
と。新國キタへ。嫁カハせしむる。とて。いふまに。とて。いふまに。  
とて。いふまに。伯イホと。新國キタへ。嫁カハせしむる。とて。いふまに。  
とて。いふまに。其コノ中ナカに。しむる。とて。いふまに。妻メケと。家イヘに。兄ケイの。お。妻メケ  
と。妻メケと。先マに。しむる。とて。いふまに。城シロに。嫁カハせしむる。とて。いふまに。  
伯イホと。新國キタへ。嫁カハせしむる。とて。いふまに。其コノ屍シと。新國キタへ。嫁カハせしむる。とて。いふまに。  
とて。いふまに。とて。いふまに。妻メケと。屍シと。新國キタへ。嫁カハせしむる。とて。いふまに。  
とて。いふまに。とて。いふまに。妻メケと。屍シと。新國キタへ。嫁カハせしむる。とて。いふまに。  
とて。いふまに。とて。いふまに。妻メケと。屍シと。新國キタへ。嫁カハせしむる。とて。いふまに。

海に舟を乗せしむるに  
ても。いふまに。舟のあはれに  
てしむる。























一しそを佐よねまを所へ出つて家々掃見  
 一しむらうの世を渡る志れ物やわらぶるよ  
 一しむらう小人ありそつま人の出入りせまけ  
 一しむらう酒酒日もある海にもよるらう  
 一しむらう正々賢孔なるといふらう  
 一しむらう舟を所はるるにす  
 一しむらう治乱を中能うし  
 一しむらう一むらうの意も勵孔崗ふま六つ  
 一しむらう主君そ大く福を授けあす  
 一しむらう一法より用を起し  
 一しむらう一敵之為也

一しむらう一思湯を女をいふ  
 一しむらう一神洞の志れ何  
 一しむらう一夫小あり又他人の只端を奪取て  
 一しむらう一多難ひとあり成ふ  
 一しむらう一しむらう一傷華と  
 一しむらう一忠孝に全き  
 一しむらう一食まうらう



あしを全初りねん人よ来ぬへーとて堪忍  
うしなうハ大言なりぬハちなり大なる大なる  
皇統候も徳候なりて下り海なり一人あま  
きひくぬ

海白世よ多く思ふと志士は世のともなる  
不いまれなり。英海は有るなり。業  
みち一病のりともなり。世なりともみ  
し。不福なる何なり。此類悪多き物なり是  
七思福之地の靈あり。  
一國之主政その名を先括

一君子終云く事云ふ事云く人益逢る直云  
正。直云く事云く人益逢る直云く  
其地先括矣。

大明一統志







勢を十萬はうひあせし人なり此をこの國に  
主なる國基の上より下よりの上段に多し勅無也  
るよ世人は多く空断をのこしあり裁よ空  
て空をあり軍より預るを精いを用ふ不  
道亦皆ありありたるに魁のわたりきんと  
無く福を厚くし其善い前より多し行る  
るよ軍よりありしを用ふれらるる大なる  
る空よりなり其書の上よりまけぬやしよと位  
と考にしよひしとくれとらよ實あり塞  
りしよ一幾時に上よりと云は一向くしよひしを

英疑夫

新ありしよのりよ塞のりよ一時に世を理をうらり  
けりしよ其勝りしよのりよ塞の上より成る陣之成  
ゆ多く教を味をたしよのりよ勝つに無理を  
も志けし勝ふしよとくし謀をもけし其物  
ありと英と云ふ人しよと云はしよと云はしよ  
ハ僕らと云ふしよと云はしよと云はしよと云はしよ  
かし軍より勝るしよと云はしよと云はしよと云はしよ  
て此をこの國に



一 國主無用文武と有る事

武を若く文とたす事一とありて後をれその

もの事

或曰矣然文武日共に或國なる者も武と云ふ者  
と云ふ者も武と云ふ者も能く修めしむる者も  
くんとありて事共々天威多うしつ子星  
の他にも安く治めしむる者も

一 良將之器

勝つべきししよよと云ふは其の波乃くと勝つ  
構とありありあり

徳の大切なる人といふは此構を有する大ね

たり。情態をこころとて風とすけ帆の配合

をいふは其の構の波のうきと見え舟上下

をさすの安き一構取一構あり合戦を

扱とあり勝る未だ一構あり一構あり

ありありの意に大なる木のきと雲一とあり

度と人の人をつげ舟をさす一と云ふは

と和戦一と敵の口構にありと入るは

よ戦と生一とありとありとありとあり

葉つきののさかやうと海流とありとあり































るらぬ。一。松永ハき道彦成得。色口ノ人トモ  
 して。きむよきて。高ノカヲ忘。い。う。も。七。時。子  
 多。心。を。病。う。き。る。子。風。吹。を。初。也。う。れ  
 丹。子。心。こ。り。松。山。ハ。明。海。子。七。ひ。く。ま。と。お。死  
 ら。んと。極。わ。き。に。却。て。生。得。る。う。ま。り。地。と。し  
 中。一。又。人。と。七。條。し。う。る。死。子。其。利。と。あ。ま  
 う。ひ。く。ほ。く。か。ち。お。り。赤。井。ハ。お。海。子。り。舟  
 列。の。中。年。に。り。て。船。岡。子。也。一。つ。け。ひ。ま。に  
 懸。で。一。く。審。を。以。多。の。病。子。り。う。り。あり。馬  
 鉄。炮。子。也。矢。あ。し。う。と。い。ひ。唯。ら。り。り。川

付。く。射。を。や。一。向。よ。鉄。あ。く。り。り。得。と。は。信。也  
 一。射。ら。し。う。く。こ。も。鉄。と。因。之。海。の。時。七。敵  
 容易。王。附。は。を。信。り。う。り。又。自。か。え。岩。に。一。敵  
 入。ま。り。う。あ。く。い。苦。而。を。川。の。け。備。と。立。へ  
 一。日。海。ら。せ。ん。う。あ。う。り。一。鉄。炮。と。も。六  
 町。七。先。う。又。陣。隊。の。し。う。い。あ。と。足。さ。り。又。う  
 子。た。右。の。も。え。も。ま。一。一。鉄。わ。を。と。射。を。と  
 ん。と。あ。ま。り。り。

一。お。志

大。お。の。家。に。信。る。の。と。も。あ。し。を。ま。ら。れ。や。う。ら。ら。る



そよ

そよよのうらうら吉の北地を離れぬあ

果実よーなるきとさる中の方志さうわらふ  
付入る

果実よ入るきとさる變に何となく物さうらうら  
順風よ吹来軍いりらるる風向いあらまうら  
とせよ

流るる川きえを付捕らひー合戦の勢  
乃こころい疾風甚而ゆいーく吹来

て敵の軍吹ひくー尾張勢の勢  
と付捕らひーなり

捕あし揚べきか武士の多うらうら  
と付捕らひーなり

お園あふると池田橋入信輝と五正十三  
九日尾好まき日終るる系にー我りー時

伝輝にやうらうらとーくさうら付く  
まらまらすうらとー果して池田の勢

よらひーあり平亦祝え  
女系内宴這舞らうらとやうらいそ付あて破



まじりしれ

まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ

軍字

燈火の心細おく先赤くもわろ侍  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ

か

まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ

まじりしれ

まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ

一難

まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ

まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ

まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ

まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ

まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ

まじりしれ

まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ  
まじりしれ

大層

二



ひさして討てて。遊軍を八國に備へて。く  
 角一河をこも敵ハ大畧こころす。おと落  
 るり云傳へ伝ふれり。是に種この口傳ふるに  
 或旁らり智謀をもあまあり。原る事  
 こころいし畧

漢白多勢なる敵利ハ繁勢ひひひこ。其  
 もも謀と廻し務より多し。その上中  
 とあわく。法をのこし。謀士のりる

月のかめに挑む軍ハ畧津にうつるる。し  
カツキウ

天下の運道と拂くしきあり。其業ハ天  
 とゆを周旋とひるり知し。  
 まわすは心に。て智を過るハ強き敵なりと  
 辨るるあり。

心のそこうし。を津地祇よかなり。やうに謀と  
 畫し。新まに。冥感とては。操利より多し。  
 萬民の無を。治さ。えよ。忠を。母よ。あを。畫  
 たり。と。宜よ。おと。ハ。だ。山。川。ま。く。に。在。り。い  
 たり。ハ。幡。字。を。山。よ。も。此。語。を。あ。い。ひ。と  
 り。也。



家出に只徳と云ふはけと云ふれは、濁るは云ふ  
と云ふ事。

穢田酒造業は、のちと云ふ事、田舎  
郷あまの事、に不安、了をを、何所

物。

を、味と破れん物、家、在、政、家、業、一、敵

と、入、り、り

を、國、之、中、之、虚、一、よ、人、母、之、敵、之、に

家、一、入、事、物、物、り、ぞ、れ、い、ま、い、り、我

國、と、破、り、め、く、う、後、も、敵、一、入、事、破、り、る、事

契、沈、思、し、る、に、我、の、利、と、云、ふ、も、國、の、心、と、云、ふ

と、事、揚、之、揚、之、も、相、其、老、は、世、に、か、れ、い、り、國

了、也、事、物、業、揚、之、留、守、之、心、を、目、記、ら、る

五

吾、之、の、身、犯、し、つ、後、小、淫、の、使、乃、西、河、中、を、云、ふ、也

吾、の、事、を、子、を、可、し、る、也、口、子、を、酒、の、仇、何、れ、と、云、ふ

此、も、也、能、日、若、可、事、也、若、能、何、と、云、ふ、仇、也、唐、子、の、是、者

之、也、吾、の、私、人、不、害、と、云、ふ、又、謝、あ、ハ、文、武、之、相、也

也、者、故、君、撰、給、に、兄、の、子、を、以、厚、め、秋、仁、傑、の、事、子

元、嗣、之、司、宣、道、に、尊、業、韓、俞、ハ、吾、代、を、と、り、め、契、守



日代もさう。作らる。宛も世のあまふさうり  
 女の尊なりん。もた然にし。仇あるもや。や  
 なも。もめる。鳥字の志也。このなを  
 志らる。もさう。上下の感。もさう。もさう。もさう。  
 下て親族のよう。もさう。もさう。もさう。もさう。  
 流し。ゆる。なり。もさう。の直と。責なり。也。  
 予。五十。八。秋の比。比。鷹や。のみ。もさう。もさう。  
 の。もさう。もさう。もさう。もさう。もさう。もさう。  
 傳。也。二。入。浦に。到。り。わ。志。り。もさう。もさう。もさう。  
 も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。

にも。よ。り。末。宮。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。  
 親。の。人。何。り。是。何。人。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。  
 極。上。倚。り。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。  
 の。上。に。也。ま。り。呼。せ。綱。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。  
 な。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。  
 翁。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。  
 情。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。  
 実。也。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。  
 仁。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。  
 不。裁。之。属。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。も。さう。



〇

治る子ハ順風ヲ走ルコトハ船ノ安キニ如ク  
何處ハ以テ流ハ逆風ト向小舟ノ危キニ似  
ク。是等ノ子此安危虚実ノ事ヲ辨ス  
ク。是等ノ事ヲ

幸

元和二年三月十日

小瀬浦菴之長政

通行奉有  
大同九年  
二月二十  
日

大同九年二月二十日目錄

- 一 諸事ハ再母衣之儀等ノ事
- 一 御達御ノ事
- 一 城外依ノ人等回所託ノ事

大同九年二月二十日



大田記卷第二十二  
大田記卷第二十二  
大田記卷第二十二  
大田記卷第二十二  
大田記卷第二十二

大田記卷第二十二

○黄母衣之衣

戸田民部少輔

升上忠右近尉

部多馬正

野村伊左守

尾茂甚右衛尉

伊藤丹後守

一柳右左大史

赤坂平右衛

三子丹後守

津田右兵衛尉

相原且右衛尉

長原のぼり

青木民部大輔

毛利左衛尉

速水甲斐守

中島式部少輔



眼部宋女正  
荒川助八郎

山田久之郎  
山田忠吉傷射

長坂三子正  
伊木七右衛門

壬若九升  
石尾下野守

○御使番元

作之間河内守  
山城宮内少輔

涉川豊前守  
三上与三郎

熊谷内亮  
箕部源政守

作敷駿河守  
布施金屋政守

布施金屋源守

竹中貞右衛門

水原石見守  
友和右衛門

秋山原吉傷射  
松井若助

大谷源八郎

○市島也七次

赤七子組九云

部主馬正  
堀田圖書助

野々村伊与守  
中鴻式部少輔

赤野龍人

青木民教少輔

伊藤丹後守



○五年の

是の頃子を生じて其國にて家と居る

○大七平寄

家康

加賀大納言の家

備前中納言の秀秋

毛利中納言の輝元

越後守の景勝

此五人と秀秋は其の一人に下は

吉河は其の一人に秀秋は其の一人に下は

吉河は其の一人に秀秋は其の一人に下は

吉河は其の一人に秀秋は其の一人に下は

○三人の小年寄

生駒雅楽助

中村武敏

堀尾兼光

此三人は大七平寄之内に其の一人と不和の事

事有るなり其の一人は其の一人と不和の事

有る者あり其の一人は其の一人と不和の事

○小姓頭

福原右衛門

時田權作

赤松左衛門

長谷川武敏



京本右京亮

中江式部が恠

○普請手の六人

作久間河内守

龍川豊前守

作藤原河内守

水野忠成

竹中久忠忠武尉

右六人分る廻小姓と二子七百人之内より撰

わしは道一殿之なりと不違連之理より

以下よりいづれも跟張りたりと唯知る

下よりいづれも跟張りたりと唯知る

此所三行の了

秀次公命五岳耆英聯句會之詩

黃鸝語太平

南禅寺

語心院

城南正月轉黃鸝

一曲太平相賀来

出谷其知天下否

唐虞春也盛於斯

同

東福寺

龍吟庵

一曲黃鸝出谷辰

堯紅紫紫物皆新

金衣亦似誇華袞

語到青雲天上春

同

相國寺

鹿苑院



鶯亦欣逢聖代時

太平乙下為年基

聲之高語弄春色

柳上奏歌花上詩

丁酉月

相 普廣院

黃鸝初出羽毛成

飛入梅邊語太平

今為聖王賢相舍

息加翔詠捲歡聲

天於寺

禪昌院一

黃鸝出谷報新春

聖代祇今為俗淳

編唱太平功第一

金衣公子上麒麟

全

建仁寺 兩足院

黃鳥出幽春意温

太平嘉象語村

宮鶯百轉曾論學

都在思無邪一言

同

東 天護庵

雪盡冰消鶯語温

太平聲似賀三元

金衣且定江南策

高誦韓王半部論

同

天 三章

天下服月朝洛城

花間鳥亦識威名



太平有象村々裏

全

呂望非魚幾數聲

天  
梅真

春行萬國歲華豐

聖代尚鸞々有語

同

聞得遷喬一曲中

太平世々不堯風

天  
菊齡

聞得黃鸝語太平

僧中今見來儀鳳

同

聖朝無處不歡聲

一曲綿蠻樂九成

建  
古澗

春來待得出幽鶯

楚雀一遷喬木後

全

日暖園吭語太平

萬年枝上有斯聲

南  
梅心

際太平時報太平

聽竒百轉垂楊裏

全

暖園語輒出幽鶯

高祝堯年不惜聲

南  
梅而

出幽黃鳥已遷喬

聖代祇令榮天下

語報太平聲正嬌

綿蠻一曲奏簫韶



同

南

英岳

黃鸞百轉報平安

花外柳邊春一般

非膏鳳鳴知聖代

綿蛮高唱萬年歡

全

南

悅林

紫北紅南花滿城

太平一曲屬黃鸞

綿蛮似祝春皇壽

枝上高呼萬歲聲

同

南

虎岩三

洞道雪消春色鮮

騷人停駕曉鶯邊

百花風靜太平日

一曲調高樂五絃

同

東

月溪

出谷黃鸞語太平

近聽聖代獨呼名

蒼周八百年乙下

呂望非熊春誦聲

全

建

進月

黃鸞出谷雪初晴

日一春城語太平

一曲綿蛮同律度

認成聖代樂韶聲

同

東

友月



出為黃鳥告春來

突漢太平如語盡

全

綿蠻語軟太平辰

十雨五風花有色

同

上苑黃鸝賀歲新

堯紅紫紫花天下

樂日堯風花亦開

金衣公子是雛枚

東 集雲

喬木枝頭未報春

黃鸝亦道榮何久

東 惟舟 四

隔簾高語太平辰

百轉色中幾度春

全

黃鸝出谷雪初消

百轉聲中着心聽

同

聽始奇哉新呼鸞

祇今聖德及飛鳥

同

金衣出谷向春來

東 竹卿

閑語太平喉舌調

半歌億舜半千堯

相 瑞雲

柳蔭梅塢以春鳴

高語太平千萬聲

東 圭琳

不鳴條苑自紅



鶯語似聞元得玉

太平乙下一聲中

同

東

剛外

出谷黃鶯聽始奇

聲高報太平時

金衣亦似聞皇極

百轉鳴春元祐枝

全

南

文殊

三請黃鸝語更新

太平有象洛陽濱

金衣相賀一枝上

天下再回元祐春

同

光華

五

黃鳥聞轉苑林

太平嘉瑞入新吟

湯王祝網亦多事

梅柳陰中德及禽

秀次公命五岳春英聯句

詩客尋梅到吟於似求遺野賢

聖皇燒栢祝花鹿宜越製齡仙

此與以繁多略焉南禪以心傳西堂秉

拂察中故後出座矣玄甫三長老西咳

允長老惟杏哲長老与秀吉公行肥列

名護屋故後出座矣



教下秀吉曰此乃在予者其在  
乃此之矣在失以美少之也然  
伏見山守子茶屋在學之<sup>十</sup>法侯大史  
主外茶乃乃在寸寸侍の如也子あ  
後めいしへよ子寸記を其れ云乃樂  
乃家志めえんとく此亭子と立有  
道くに承元長老記て曰

學問所記

城別伏見里者天下勝境也大相國相攸  
築大城營華第栽松竹作深林建高堂号  
學問所堂之四惟構第屋々中一々賦倭  
歌吟詠在景矣集故人英豪剪仙茶而為  
數奇可否堂前有長橋過此橋者見江山  
烟景不知歸期故名之以日昏於數奇其  
心親切者臨此橋上可啓所希求不論親



往疑征

鍊成景慕之深招以欲為賓客大相國外  
隆作勝遊丙不忘千戈大明已入貢朝鮮  
急往伐四夷聞為來享寔古今名相也  
慶長三年戊戌孟春十一日

前南禪兼允謹誌



秀吉公御遺物札和賀大納之利中納言能以下之  
如依面寫之

一 卷筒御帆

用右和家席

一 合子之百枝

日

一 三好正宗

大納言利家

一 合子之百枝

日

一 合子兼壺

小倉中納言

金吾

一 合子百枝 吉克服指日

一 枯木之弦

江戸中納言秀忠

一 鷹之結

會津中納言景勝



一 二五号

一 七五号

一 四吉

一 吉廣の刀

一 某号 身日三三山  
厚表の郎

一 別号

一 子一也正宗 日

一 吉克 日

一 金子二十枚

一 貞宗 日

備前中納言

安藝中納言

淡路中納言

越中守中納言

毛利宰相

松城宰相

丹後宰相

大津宰相

岩手少将

小松宰相

大崎少将

伊集院相 毛利河津守

伴作侍候

織田少将

織田有乐

同氏部少将 大津侍候

富田在子相

言教少将

有子中納言

一 友ノ服物

一 行藏甲冑 日三山

一 正宗

一 吉之隆

一 金子二十枚

一 日 三十枚

一 日 三十枚

一 日 三十枚

一 日 二十枚

一 日 二十枚



一月 十五枚

素山法印

一月 十五枚

相樂下院

一月 十枚

元長寺

一月 十枚

吉田藏部

一月 十枚

寺西院

一月 十枚

松久院

一月 十枚

新庄院

一月 十枚

作久男

一月 十枚

奥平

一月 十枚

中川

一月 十枚

佐々木

一月 十枚

山田

一月 十枚

赤坂

一月 十枚

江崎

一月 十枚

山崎

自山寺志願是下二十二人

一月 二十枚

小松

一月 二十枚

木下

一月 二十枚

生駒



一月 子 十五 投

石川紀伊守

一月 月

秋原伯老守

一月 月

大野修政亮

一月 月

片桐東市守

一月 月

本下寅内少輔

一月 月

石甲木工次

一月 月 松投

山宮

一月 月

木下右衛門次

一月 月

石川掃部助

一月 月

物倉内膳正

一月 子 五 投

吉乃勘吉米村

一月 月

吉田武亮守

一月 月

藤田多喜穂守

一月 月

作ノ保路守

一月 月

多野辰兵衛亮

一月 月

高村下吉米村

一月 月

本下田内守

一月 子 三十 投

栗原五才次

一月 月

小西孫兵衛守







一村有南麻

日三

一貞宗

松後傳松

一正恒

能也傳松

一吉光

宗上傳松

一貞宗

吉田傳松

一太政大臣

清州傳松

一真盛

越府傳松

一元重

七作傳松

一南麻

井傳松

一何秀

部上傳松

金山傳松

一任圃

伊豆傳松

一景光

吉川傳松

一東園傳

宇津文傳松

一長光

對子傳松

一長光

安府傳松

一正恒

淡州京大夫

一忠民

中村式部少輔

一廣光

尾尾菊力先生

一大忠光

蜂次賀阿波守

一大忠光

菊守作傳松



一 尾  
 一 屯光  
 一 守家  
 一 利守  
 一 東園光  
 一 園信  
 一 園宗  
 一 三原  
 一 兼光  
 一 守家

伊藤友子助  
 坂尾信直  
 田中台初太郎  
 小石城太郎  
 海口信春  
 浦島村  
 小松大和守  
 小川古作  
 坂中初太郎  
 中河修理亮

一 吉光乃劍  
 一 志乃守  
 一 吉次  
 一 元重  
 一 系利  
 一 兼光  
 一 文  
 一 村正  
 一 利重  
 一 志乃守

伊藤友子助  
 長谷川初太郎  
 信田長心  
 多田久出  
 兼山初太郎  
 池田長次  
 宇田下中  
 堀内河清  
 岩田伯耆守  
 相良定初



一 惠吉

一 國吉

一 子平院

一 代國

一 吉家

一 國吉

一 三系

一 國宗

一 國吉

横濱天部少備

和倉吉右衛門

湯波以右大

素山武部少備

伊藤輝部少備

基兵湯野

稻妻水右衛門

幸藏但子守

岡田三右衛門

丸尾三右衛門

一 乘國信

一 長

一 長光

一 國信

一 景光

一 乘國信

一 宗次

一 國信

一 真盛

一 長光

文部省部少備

村上國信少備

有田修理亮

日根村中守

湯右和守

大村新八郎

穴内宗次内大物

福原右子物

大田龍源守

熊川中守



正真

佐國

子家元

助廣

恒家

長元

京長

直以

景光

教鴻

定和泉守

早川主馬

竹中原外

毛利民部大輔

東海石見守

菅原右兵衛尉

新庄城守

山崎右京亮

中井式部大進

西田長守

一 忽元

一 困元

一 安吉

一 直繼

一 法成寺

一 忽貞

一 盛元

一 忽元

一 次

一 文字

日柳世織部

石川玄繼元

山内對子守

有子之玄中元

本田中務大輔

林原式部大輔

大久保治部大輔

直江山城守

南部大膳大進

清浦長守



一助真

伴種右京

一青江

秋田太正

一雷之次

作新中務

一光忠

夏田信康

一助光

伊藤長房

一園俊

氏家内膳正

一園外

畠本下村守

一藤清

古田步部少輔

一石氏

丸尾大隅守

一園外

大谷新助少輔

一園示

山中出守

一急吉

吉野下野守

一園光

長谷川右兵衛尉

一急光

市橋下總守

一助光

作中丹後守

一急也

津田長門守

一下坂

池田備中守

一三原

木下丹後守

一急真

伊田河内守

一園宗

山口守中務



一 敬島

一 長光

一 忠貞

一 村心

一 長光

一 助真

一 助三

一 之介

一 安光

一 碧元

後の大坂助

長光傳如光

青山修理亮

赤松上総守

松屋源政守

西尾豊後守

好繁每作守

山崎房之丞

安光及長光尉

長下吉野少将

一 之介

一 國宗

一 氏子

一 守家

一 盛光

一 國光

一 久宗

一 保昌

一 吉光

一 國友

將田信休

松崎何与守

谷出羽守

石川備後守

高田河内守

木村伊勢守

生駒重盛助

吉西備中守

氏家志平守

生駒快相守



一長谷部

一盛文

一國吉

一惠元

一國吉

一直家

一凡

一惠文

一之比

一丁人久

片桐重昭正

川島龍太郎

文木忠氏

服部古作

橋本河内守

上田重正

水野和泉守

一柳監地

原深波忠

矢野忠成守

一之丞

一國門

一益家

一文字

一守家

一村正

一基家

一國後

一惠文

一之丞

福業孝六

藤田三十九

中野勘吉傳封

丹羽勘介

秋田安房守

松本忠房公

山根三三守

真田伊豆守

信原房島助

橋本吉新少輔



一 惠之

一 月

一 三九

一 惠之

一 掃之

一 國 考諸

一 長之

一 克忠

一 文之



少見臨江印

十月乃為

之利者其為

德清作德書

大若又其

少不校之亦耐

青身石燕休

德山竹後

金壽世書寫



